# 第３章　総　括

## 第１節　篠窯跡生産須恵器について

### はじめに

今回の喜多垣遺跡の発掘調査の結果、飛鳥～平安時代の遺構内や包含層から多くの土器類が出土した。それらのうち、平安時代の９世紀～ 10世紀の遺物のなかには、京都府篠窯で製作・焼成された緑釉陶器１点のほか埦を中心とした須恵器が少なからず認められた。

篠窯の製品については、かなり研究が進んでおり、細かい編年案も提出されている（第２図、石井2001）ことから、それらに照らし合わせ、喜多垣遺跡における篠窯製品の流入状況や、朝来市山東町域を中心とした地域における篠窯製品の導入状況についても調べてみることとする。

### 山東町域における篠窯製品の類例

管見によれば、朝来市山東町域を中心とした地域で出土した緑釉陶器・須恵器のうち、緑釉陶器については篠窯製品と判断されている場合が多いものの、須恵器については、報告書において明確に篠窯製品と位置付けられている場合はそう多くない（第２図）。

山東町域で緑釉陶器が出土している遺跡は、今回調査の喜多垣遺跡をはじめ、柴遺跡（鈴木ほか2009）・方谷遺跡（吉識編2008）・梅ヶ作遺跡（藤田2008）・梶原遺跡（藤田2008）・筒江大垣遺跡（別府ほか2008）の計６遺跡（第３図）である。これらのうち、柴遺跡は「驛子」と記された木簡が出土したことから、粟鹿駅家の一角とされ、すぐ北東側裏に存在する方谷遺跡も駅家との関係でとらえられている。また、梶原遺跡と梅ヶ作遺跡も近接して存在しており、一連の遺跡としてとらえることができることから、柴遺跡・方谷遺跡、梅ヶ作遺跡・梶原遺跡、筒江大垣遺跡、そして喜多垣遺跡の４つの単位としてとらえることができよう。

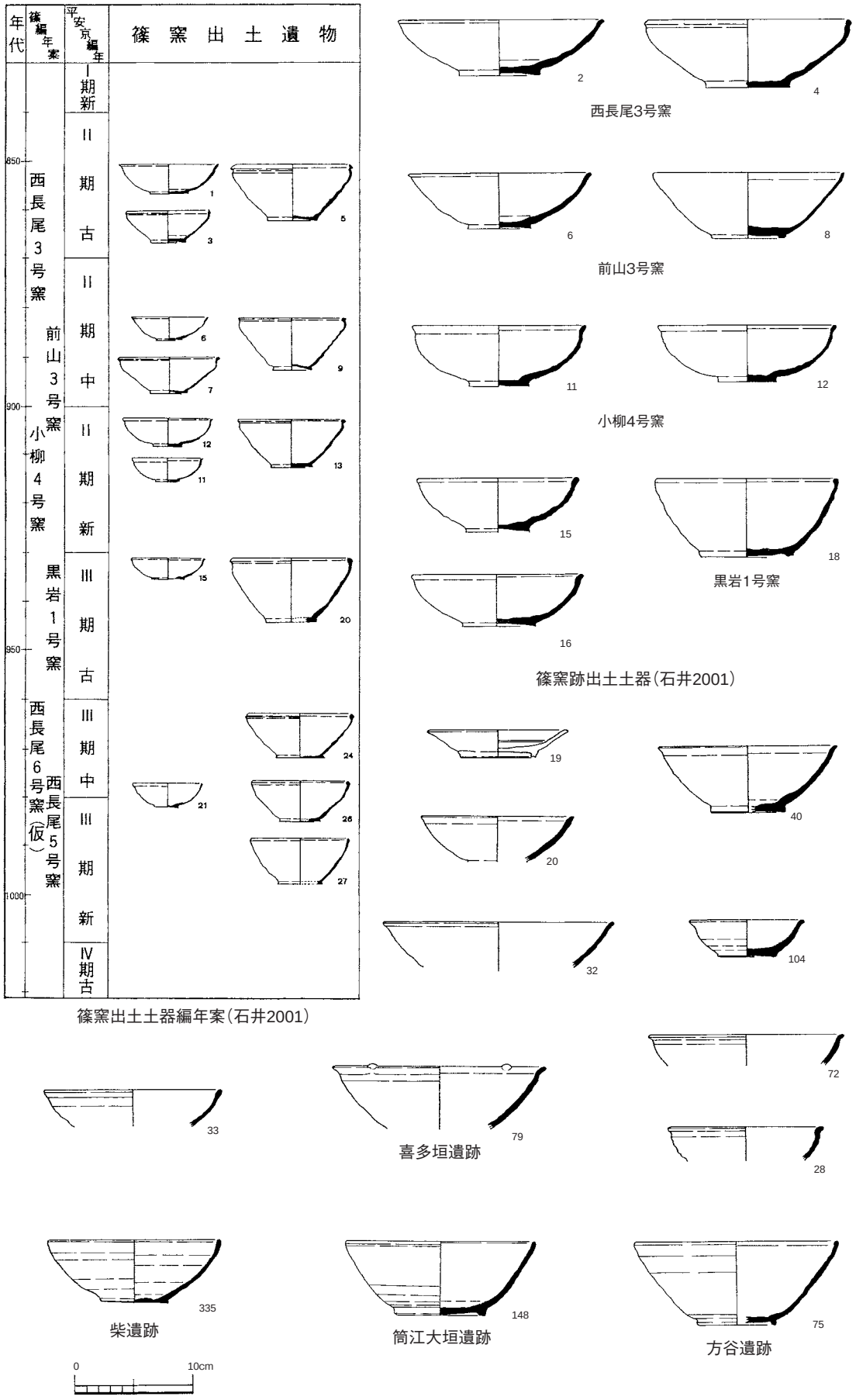
一方、出土須恵器が篠窯製品と判断された遺跡は、今回調査の喜多垣遺跡以外には方谷遺跡・筒江大垣遺跡の２遺跡をあげうるにすぎない。しかし、柴遺跡において篠窯製と推定できる形態のものが存在していることから、もう１遺跡を加えて４遺跡となる。ただし、柴遺跡と方谷遺跡は先にみたように一連の遺跡ととらえられることから、３単位の遺跡とすべきである。

喜多垣遺跡では緑釉陶器皿（19）・須恵器埦（20）の篠・西長尾３号窯と推定される９世紀後半に位置づけられるものが最も古く、次いで篠・前山３号窯と思われる須恵器埦の（40）や、前山３号窯か小柳４号窯と判断した須恵器埦(32)と小型埦の(104)があげられる。須恵器埦(33)や輪花の須恵器埦(79)および須恵器埦の（72）も含めて篠・小柳４号窯製と推定している。10世紀中頃の篠・黒岩１号窯のものは須恵器の埦と思われる(28)があり、これが最も新しい。なお、須恵器坏蓋の(59 ～ 61)も篠窯製で、10世紀前後のものと推定しており、須恵器埦（41）も篠窯製であろう。

柴遺跡出土の（第２図335）は鉢に近い形態で、篠・前山３号窯か小柳４号窯製の可能性があり、９世紀末～ 10世紀前葉のものであろう。

筒江大垣遺跡から出土した（第２図148）は、篠・前山３号窯と思われ、９世紀末頃とされている。

方谷遺跡出土須恵器埦の（第２図75）は篠・西長尾３号窯か前山３号窯製と思われ、９世紀後半であろう。




第２図　篠窯出土土器と山東町出土篠窯製土器類

## まとめ

以上のように、山東町域を中心とした地域で出土した篠窯製須恵器をみてきたが、明確に篠・西長尾３号窯製と判断できるものは認められず、９世紀中葉ではまだ篠窯製須恵器は導入されておらず、９世紀後半以降であることがわかった。

一方、篠窯製緑釉陶器は、小片のため製作地や時期が不明の梶原遺跡や梅ヶ作遺跡例を除いて、柴遺跡や筒江大垣遺跡で多量の出土が認められる。柴遺跡や方谷遺跡では駅家という遺跡の性格上、早い段階から緑釉陶器が使用可能であるにもかかわらず、その導入は10世紀以降であり、筒江大垣遺跡においても10世紀前半からの導入となっている。これらのことから、山東町域を中心とした地域では、篠窯産緑釉陶器の導入にさきだって、その直前には篠窯産須恵器が導入されていることが判明した。また、山東町域を中心とした地域では、篠窯製須恵器が確認されている遺跡は多くは認められなかった。なお、筒江大垣遺跡で多量の緑釉陶器が使用されていることは注意に値する。

ところで、柴遺跡・方谷遺跡ではほかに灰釉陶器や多量の墨書土器・転用硯・稜埦に加えて製塩土器が出土しており駅家としての充分な遺物が出土している。一方、梶原遺跡・梅ヶ作遺跡においても灰釉陶器・稜埦・製塩土器が出土しており、筒江大垣遺跡にいたっては灰釉陶器のほか墨書土器・稜埦・円面硯・転用硯・製塩土器が出土している。梶原遺跡・梅ヶ作遺跡・筒江大垣遺跡の性格の特殊性が窺えよう。また、今回調査の喜多垣遺跡と、筒江大垣遺跡や梶原・梅ヶ作両遺跡の立地が似ていることが注意されよう。すなわち、山東盆地内の中央部ではなく、縁辺部に存在している点である。しかも、喜多垣遺跡北部調査区の東側斜面下で検出した、柱穴群の山側を溝で囲んだ遺構、すなわち雨落ち溝を有する掘立柱建物跡と推定されるものは、梶原遺跡においても斜面下で発見されている。

次に、筒江大垣遺跡や梶原遺跡・梅ヶ作遺跡が宝珠峠を越える街道沿いに位置していることが注意される。すなわち、その街道が、西に存在したと推定（岸本2012）される加都遺跡付近の円山川の河津（川津）と、古墳時代中期の首長居館である柿坪遺跡を結ぶ街道であることから、古墳時代中期にまでさかのぼることができると思われ、街道沿いに位置する茶すり山古墳の存在もそのことを示していると思われる。このように古くからの街道沿いの峠付近に位置する筒江大垣遺跡や梶原遺跡・梅ヶ作遺跡は、平安時代においては関所的な意味合いがあった遺跡である可能性があろう。このことは、喜多垣遺跡においても、その位置が、朝来市和田山町竹田と山東盆地を結ぶ街道が、山東盆地に入った部分であることと無関係ではないものと思われる。なお、この街道は古墳時代後期までさかのぼると推定される。

このように、本遺跡も含めた、緑釉陶器・稜埦・転用硯・製塩土器が出土したこれらの遺跡は、山東盆地の出入口に位置し、役所的な遺物を出土することから、関所的な性格を有していたと推定しておきたい。そして、そういった遺跡には篠窯製の須恵器も導入されたものと思われる。

石井清司2001「篠窯の実年代」『京都府埋蔵文化財論集 第４集－創立20周年記念誌－』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
岸本一宏 2012「交通と伝達①湊・駅」『古墳時代の考古学』５　時代を支えた生産と技術　同成社
鈴木敬二ほか 2009『柴遺跡』兵庫県文化財調査報告 第360冊　兵庫県教育委員会
藤田　淳2008a「梶原遺跡 梅ヶ作遺跡」『梶原遺跡 梅ヶ作遺跡 北山遺跡 大月北山古墳群』兵庫県文化財調査報告第344冊　兵庫県教育委員会
別府洋二ほか 2008『筒江大垣遺跡』兵庫県文化財調査報告書 第335冊　兵庫県教育委員会
吉識雅仁編 2008『方谷遺跡』兵庫県文化財調査報告 第344冊　兵庫県教育委員会